

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

(代表者 高野 修一 会員数 約16,200人)

T E L 0422-51-4554

1 前 文

平均点は、今年度は『歴史総合、日本史探究』が56.99点であった。前年度の旧課程『日本史B』の平均点が56.27点であり、0.72点上がった。『歴史総合、世界史探究』の平均点が66.12点であった。第1問の「歴史総合」からの出題は、高等学校で日本史探究を学習してきた受験者にとって、世界史探究的な知識や思考を求められる箇所も見受けられた。次年度に向けては、「歴史総合」からの出題の難易度だけでなく、「日本史探究」の問題との難易度のバランスにできるだけ配慮をお願いしたい。以下、『歴史総合、日本史探究』の試験について検討した結果を申し述べる。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

設問数は大問6題、小問33題の構成であった。試作問題では32問構成であった。出題範囲は原始から戦後（平成）までであり、歴史総合、日本史探究の学習範囲内で適切な設定であった。歴史総合の範囲としては近代化の出題が多かった。新学習指導要領における初めての『歴史総合、日本史探究』であったが、これまでや試作問題と同様に多様な資料を用いた出題が多くみられた。ただし、例年のような史料ではなく生徒のメモやグラフ、複数資料による資料読み取りなどである。また、探究学習を見据えた生徒のメモやワークシートといった形式が随所に取り入れられた。

出題形式別では、正文選択が10題、正誤組合せが3題、年代配列が3題、語句の組合せが2題、正文組合せが8題、誤文選択が7題となった。従来よく見られた語句の選択問題は出題されなかった。また、昨年に比べ正文組合せや誤文選択形式が増加した。年代配列については因果関係や年代ごとの理解によって受験者に正答を選ばせることもできて歴史的な思考力を問う問題として適切な形式であった。

時代別では、時代横断型の出題が16題と最も多く、時代ごとの知識・理解を基に、各時代を比較して多面的・多角的な視野から思考し、判断する力が求められた。各時代を問う問題では、弥生の出題では1題、平安の出題では3題、鎌倉の出題では3題、江戸の出題では9題、幕末の出題では4題、明治の出題では5題、大正の出題では1題、戦後の出題では7題であった。時代単独では問われていない時代もあるが、時代横断における出題が多く、歴史総合、日本史探究の学習範囲からの出題バランスとして適切である。戦後も平成までを含み多く出題され、戦前期に偏った出題でないことで、戦前と戦後の関係性を問えている。

分野別では、多分野にまたがる混合問題が17題であり、分野ごとの知識を理解した上で、各時代を多面的・多角的な視点で概観する力が求められた。各分野を問う問題では混合問題も含めると、政治14題、社会経済17題、軍事外交16題、文化5題であった。今年度は社会経済・軍事外交両分野からの出題が多く、特に軍事外交については昨年より増加した。政治分野は昨年より若干少ない出題であった。以下、詳細を見ていくものとする。

第1問は「歴史総合」からで、「歴史上における境界」という主題で会話文や資料活用形式で出題された。範囲としては近代化からグローバル化までを横断して問う形となっている。出題上の資料を多く取り入れているが、資料といっても生徒のメモのような日常の学習において触れる資料とは

意味合いの異なるものが多かった。歴史総合という科目の性質上、日常の授業でも一次資料の学習にこだわりすぎず大まかに意味をとらえさせていく可能性を示唆しているといえる。ただし後述の日本史探究における資料の扱いとの違いも念頭に置くべきである。

問1は主権国家の意味と地図から広州の位置を答える組合せ問題である。港の位置については教科書では「清がヨーロッパ船の来航を広州に限定」のような記述はあるが、港を広州と判断し地理的把握も同時に求められ、やや難しかったと考える。ただし、形式としては良問であり、昨年までの『日本史B』でも地図の活用は少なかったことを考えると今後の学習の方向性を示す問題といえる。

問2は資料とパネルの読み取りと背景に関する正文選択問題である。資料から時系列を整理し、事件が江華島事件であることを判断する共通テストらしい出題であった。

問3は会話文の空欄に関する語句の組合せ問題である。穀物法に関しては日本史探究では扱わないため、歴史総合の内容として学習が必要である。ただし、イの判断をしていくことで当時の世界貿易を主導しているのがイギリスであると推測することは可能と考えられる。

問4は空欄ウに当てはまる正文選択問題である。会話文を読むという共通テストらしい出題といえる。

問5は正文選択問題である。地図からメモの正誤を判断するが、時系列を見ていくことで判断ができる。このような出題では、データベースを使用しているとあるので、データについては表で出題し、ミシシッピ号のルートを地図上に複数提示し、どれが正しいかを選ばせるような出題も考えられる。単に読み解くだけにとどまらずに、知識・技能のうちの技能的要素を活用させたい。

問6はグラフの読み取りに関する誤文選択問題である。「世界恐慌」、「ベトナム戦争」「冷戦終結」の時期を整理できていれば判断ができる。

問7はメモに関する出来事の年代配列問題である。日本史探究受験者にとっては、やや難しく、改めてグローバル化の範囲における世界の出来事を正確に把握していく必要性を認識できる問題であった。ただし、出題形式についてはメモという形をとらなくても、従来の形で出題可能である。例えばパネル形式にして、それぞれの時代の様子がわかる写真資料を基に年代配列をさせることも考えられる。

問8は探究のための問いと考察するための学習活動に関する正文組合せ問題である。ベルリンの壁の崩壊の時期やお雇い外国人について把握していれば判断ができた。共通テストらしい出題形式であり、試作問題等でも見受けられたため受験者は対応できたといえる。

第2問は菓子に着目した探究活動を基にした会話文形式の出題であった。時代は平安から昭和までを横断した。時代を遡っていきながら出題されたことが特徴的であった。全体を通して、受験者に思考を促す良問が多く、今後問題演習をしていく際に必要な要素を示唆しているといえる。

問1は資料1に関した正文選択問題である。会話文に関連した知識と資料を読み取り、合わせて判断する良問であった。

問2は資料と図に関して述べた文の正誤の組合せ問題である。下線から時代を特定し、資料や図の記述内容から判断できる問題であった。知識を活用しながら資料を読み取ることで推測させる共通テストらしさがうかがえた。

問3は誤文選択問題である。平安時代の文化に関して知識を活用して解答ができたが、他の問題との比較をして、会話文を生かして「菓子」や「平安時代の食文化」などに限定した問いにすることも考えられる。

問4は中世の禅宗に関する正文選択問題である。それぞれの選択肢の時代が異なっているため解答しやすかった。

問5は問1～4からさらに発展して学習をするという設定における出題である。知識だけで解答は難しく、ここまでの会話文全体を読み込んでおくことで「国内での砂糖生産が18世紀後半頃から普及」や「江戸時代にはいろいろな和菓子が生み出され…砂糖が広く使われるようになった」などの情報を選択肢と照らす必要がある。多彩な資料を活用しながら思考させる共通テストらしい良問であった。

第3問は外交と文化の関わりに関する原始・古代の出題であった。全体を通してテーマについて整理・理解ができている受験者にとってはシンプルかつ解答しやすい問題が多かったといえる。一方で、今回の出題内容であると従来のリード文と下線部形式と変化はなく、生徒が作成したプリントをより活用していく出題形式を考えていくべきといえる。

問1は3世紀までに中国大陆や朝鮮半島からもたらされたものに関する誤文選択問題である。新羅に関する知識があれば解答可能であった。

問2は唐や朝鮮半島の王朝との関係に関する正文選択問題である。唐や新羅と日本の関係に関する知識で解答が可能であったため平易といえる。

問3は正文選択問題である。資料において渤海を「高麗」と記すものを選択することを求められた。資料内の「宋」「聖武天皇」「隋」「雄略天皇」の語句を判断基準として、渤海に関する知識と照らしていく必要があった。また、資料は現代語訳のものであったが、このような出題であれば現代語訳でなく、一次資料を活用することも考えられた。

問4は大宰府の軍事的な重要性に関する正誤の組合せ問題。「健児」「刀伊の入寇」を想起することで解答ができ平易であった。

問5は外交と文化に関するメモと図に関する正文選択問題である。形式的には新傾向であるが、内容や図は基本事項であり判断がしやすかった。もし写真を使うのであれば、その読み解きを必要とするような出題への工夫がほしいところである。

第4問は鎌倉時代の御家人と戦国大名を題材とした中世の武士に関する会話文形式の出題であった。問題ごとに資料や図が多く出題されたことが特徴的である。

問1は鎌倉時代の御家人に関する誤文選択問題。半済令に関する知識を理解していれば判断が平易であった。同じように知識を問うとしても、大問全体の説明で「鎌倉時代の御家人と戦国大名に着目し」とあることから、御家人と戦国大名の特徴を比較させた表を載せ、空欄補充の語句組合せ問題のような形の方が受験者や授業者に学習の視点を示唆することにつながると考えられる。

問2は図の説明と資料に関する考察の組合せ問題である。図は頻出の『蒙古襲来絵詞』で防塁とわかり、時期も判断できる。考察については資料内の注も含めて読み込むことで判断できる。知識と資料の活用という共通テストらしい良問といえる。

問3は語句の組合せ問題。アについては「吉田兼俱の子孫」から判断可能である。イについては資料3の時期が1551年であることや黄檗宗が江戸時代に伝わったと理解していれば判断が可能である。

問4は下線部を踏まえた判断が求められた正文選択問題である。下線部やその前の生徒の仮説について把握し、貨幣鑄造が必要になる状況を想起しながら選択肢を判断する必要がある問題であり、下線部だけを読んで済ませずに会話文を参照させたいという意図があったにしても、正答を選ぶプロセスが込み入っていて、受験者にとっては解答に非常に迷う設問であった。

問5は中世の武士に関した正文選択問題である。時代ごとの特徴を把握していれば判断は難しくなかった。

第5問は近世の村を題材としたメモや資料からの出題であった。全体としては、資料自体は多く扱われているが、比較的平易で解答に悩む問題は少なかったといえる。また、第1問の歴史総合で

は歴史学と歴史教育が共存できる場をめざすという視点で現代語訳や意識が出てくることも想定される。しかし日本史探究の授業では、従来のように一次資料を読み込むことの歴史的意義を指導することは重要であるといえる。今後の授業での資料活用の方向性を示唆する可能性のある共通テストでは、一次資料からの出題も検討をお願いしたい。

問1は近世の土地や百姓に関する正誤の組合せ問題であった。「太閤検地」と「近世の百姓」に関する知識から判断が可能な問題であった。太閤検地に関連して問題作成をする場合、当時の検地帳から石高を読み取らせる、刀狩令の資料から当時の百姓について推測させるなどの出題も考えられる。知識を踏まえて社会や経済に関して考察させられるような出題を期待したい。

問2は村掟に関する正文選択問題である。資料を読み取ることで解答できる平易な問題であった。

問3は幕府の政策に関する年代配列問題である。Ⅰは天保の改革、Ⅱは享保の改革、Ⅲは分地制限令と判断できれば平易であった。

問4は鎌原村に関するメモに関する正文組合せ問題である。メモを丁寧に読み込むことで正誤の判断ができた。

問5は近世の村に関した誤文選択問題である。問1から問4までの資料やメモの内容を踏まえて考察内容を判断する共通テストらしい良問であった。グラフに関しては教科書や資料集等でも頻出の幕府領の石高と年貢高に関するものであり、丁寧に読み取ることで正誤判断ができた。

第6問は姉妹の会話文と松本清張の年譜から、明治から戦後(平成)を横断的に問う出題であった。

問1は西南戦争と同時期の政策に関する正文組合せ問題である。資料1から読み取れる内容は、時期を判断することで選択肢内の「植民地の朝鮮」について誤りと気付ける。Yについては問題文に「西南戦争開戦と同時期の政府の政策」とあることから兌換紙幣の発行について誤りと気付ける。知識と資料活用を合わせて解答する良問である。

問2は誤文選択問題である。年譜や資料2を活用して判断をしていく。資料内から第二次世界大戦期であることを判断すると、土地調査事業については時期がずれていることに気付ける。年譜からも「1944年…朝鮮半島に渡る」という記述から時期が判断できる。問われている内容は平易だが、資料から情報を見つけていくことが求められ、授業や考査においても複数の資料から情報を抽出することに慣れさせる必要がある。

問3は大正から戦後までを横断的に問う年代配列問題。Ⅰは手塚治虫、Ⅱは戦時体制の強化、Ⅲは100万部を超える新聞から時期を判断する。従来から頻出の形式ではあるが、これだけ多くの資料を出題している共通テストであれば、資料を3～4つ用意し、年代配列をさせる形式も考えられる。

問4は占領期の出来事に関する誤文選択問題である。破壊活動防止法に関する知識が整理できていれば判断できる。このように特定の時期に関する知識を問う出題であっても、戦後史であれば写真資料も豊富であるので写真による出題ができるのではないかな。

問5は疑問と調べ方に関する正文組合せ問題である。出題形式は新傾向であるが、試作問題でも類似した問題が出題されているので大きく迷うことはなく解答できたと考える。疑問あについては調べ方Wが適当であり、疑問いについては調べ方Zが適当である。ただし、資料として「意地悪ばあさん」の必要性について考えるべきである。また、『サンデー毎日』に松本清張の主張が掲載されているかは受験者の知識では判断ができるとはいいいにくい。これらについて検討すべきで、受験者にとっていたずらに資料が並べられることによって本来問いたい要素が見えにくくなるような出題は避けるべきである。例年の共通テストでは1970年代までの出題が目立ったが、「構造改革」という用語によって2000年代まで出題したことは評価できる。歴史総合でもグローバル化の範囲

で日本の現代について学習をしていることを鑑みて、より積極的に出題していくべきと考える。

3 総評・まとめ

今年度は、大学入学共通テスト5年目であり、初めての新学習指導要領における共通テストに向けて、新たな出題の形式や内容をめぐり、教育現場も期待と不安とが交錯する一年であった。

『歴史総合、日本史探究』は全体を通じて生徒のメモやグラフ、地図など多様な資料を活用し、思考・判断させる意図がみえる問題が多い構成であった。受験者の学習範囲からは解答しにくい知識問題も極力避けられていて、学習到達度をはかるために適切な難易度であったといえる。出題方法は生徒のメモやワークシートや会話文など、探究学習の場面などを想定した形であったが、出題の内容は従来の下線部から設問文と資料によって判断できる問題も多かったといえる。各大問の中で思考力・判断力を問うための案を記載したが、今後様々な工夫をしていく必要がある。初年度であるが、「歴史総合」の難易度と「日本史探究」の難易度のバランスをとることが今後の課題として継続していくと考えられる。今年度の場合、「歴史総合」は世界史的知識を求められやや難しい反面、「日本史探究」は知識のみで解答可能な問題や平易なものも散見された。時代については今年度若干の出題があったが、平成以降が出題されないことが続いている。歴史総合で「グローバル化と私たち」という項目で今まで以上に現代史を学習しているため、次年度以降の積極的な出題に期待している。この数年で資料活用から思考・判断する問題が次年度以降も出題されてきているが、今年度については、資料の現代語訳や意識の出題やワークシート自体が解答に必要な疑問を抱くような出題が目立った。第5問のまとめでも述べた通り、日本史探究という科目の性質から鑑みて、一次資料の歴史的価値や意義を授業では指導していくことが考えられるため、来年度以降の出題においても再検討をお願いする。